

中国のほんの話 (51)

## 武田泰淳『上海の蜚』

蔭山 達弥

「上海の蜚。上陸したばかりの私を出迎えてくれた、異国の蜚。それに感動しているには、私は、あまりにも、もの珍しい生活のはじまりにとり紛れていた。でも、たしかに蜚の光が街路に流れていたのだ。六月の中頃だった。息ぐるしい、悩ましいような暑熱が、近寄りつつあった」（武田泰淳『上海の蜚』）

武田泰淳は旧姓名を大島寛といい、1912年（明治45年）に東京本郷に生まれた。家は浄土宗の僧侶である。父、武田芳淳の後を継ぐために成人後に現在の姓名に改めた。しかし結局、職は継がなかった。

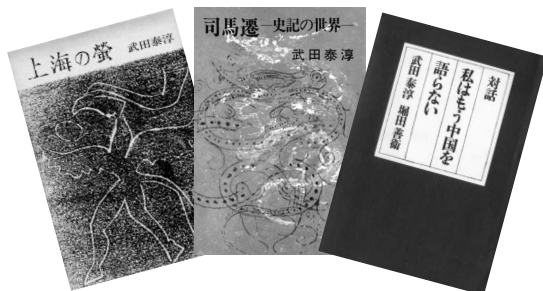
1931年（昭和6年）に東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。同級生に竹内好がいた。翌年、退学したが、この頃からいくつかの同人雑誌に関係し、習作を発表した。また、周作人の来日を機会に、現代中国文学を研究しようとの、かねてからの気運が仲間うちで急速に具体化し、竹内好、岡崎俊夫、増田渉、松枝茂夫と「中国文学研究会」をつくり、新しい学風をおこすことにつとめた。

1937年（昭和12年）から満二年間、召集されて中国華中に従軍した。「はげしい戦地生活を送るうち、長い年月生きのびた古典の強さが、しみじみと身にしみてきて、漢代歴史の世界が、現代のここのように感じられた。歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現実のきびしさを考える場合に、何かよりどころとなり得るものが、『史記』には有る、と思われた。」（武田泰淳『司馬遷』初版自序）

1939年（昭和14年）10月、上等兵で除隊。「司馬遷論」執筆の構想をたて、1943年（昭和18年）4月、書き下ろし評論『司馬遷』を日本評論社より刊行。翌年6月、上海に渡り、中日文化協会に就職。国際文化協会にいた堀田善衛を知る。

『上海の蜚』は『目まいのする散歩』に続く散歩シリーズとして文芸誌『海』に連載され（昭和51年2月～9月）、あと一篇で完結する予定であったが、著者が逝去し未完となった。単行本『上海の蜚』は1976年（昭和51年）12月、中央公論社から刊行された。著者が32歳で上海に渡ってからの約二年間の体験が、克明に綴られている。

「壁が汗をかくような暑い夏がつづいていた。洋館の内部の壁は、どこも塗料が塗られてあつ



た。蛙の背のように青く塗られた壁には、湿気の激しいときには、水滴が浮かんた。蛙のイボのような水滴は、やがてすじをなして、地下室でも、二階でも、壁を濡らしていた。私が到着の日に、フランス租界でみかけた蜚の光も、その湿気のおかげで生まれたものだった。」（武田泰淳「汗をかく壁」、『上海の蜚』所収）

「私は、なるべく短時間の間に、普通の上海人が食べるものを食べ、歩く場所を歩き、見られるだけのものを見、上海の喧噪の中に溶けこむことを心がけた。街には、朝早くから、京劇のレコードのかん高い響きが流れていた。上海の青少年は自転車を走らせながらも、京劇の歌曲を口ずさんでいた。「何日君再来」という歌が流行していた。麻雀の牌をかきまぜる音が、裏町を歩くと、どこの窓からも戸口からも聞こえていた。そして、上海の主婦や子供たちは、飯を山盛りにした丼をかかえて箸を動かしながら、口のあたりを飯粒だらけにして、貪り食べていた。食べることが難しくなっている人々は、人前で眼につくように食べることが、むしろ誇らし気だった」（同上）

文芸誌『海』武田泰淳追悼特集（1976年12月）、『対談 上海時代』（堀田善衛・開高健）で、堀田善衛は武田泰淳と酒について、「酒があれば朝からでも飲むほうでね、飲まなきゃ風景は美しくないと言ったよ。ぼくは一時、武田先生の家に同居していたこともあるんですよ。あるイギリス人の家を接待したもので、これも三階建の立派な洋館でした。それが武田先生の創作でいえば『F花園十九号』」と述べている。酒に酔うと、必ず高い所に登りたがった武田泰淳の小説『上海の蜚』は、敗戦前後の上海を記録した貴重な史料である。

かげやま たつや（教授・中国文学）